

【前ページ】
ニンファエウムの中央にある八角形の「四風のアトリウム」。壁面下部にあるトラバーチンで覆われた壁龕には、かつてこの部屋の名の由来となった風のブロンズ像が置かれていた。その上には、彫刻家フランチェスコ・ブランピッラ

(1530～1599年)による四季を擬人化した漆喰の彫像が収められている。四季の彫像はそれぞれ、花、麦、果物、月桂樹の冠を載せている。写真はそのうちの2体で、マーキュリー像(中央)を挟んで立っている。もうひとつの出入口の上にはヴィーナス像が置かれている。

文 フランチェスカ・オッド
写真 ジュリオ・ギラルディ

伯爵の 優雅ないたずら

北イタリアの貴族、ピロ1世ヴィスコンティ・ポロメオ伯爵が16世紀につくったクリエイティブな別荘、ヴィラ・ヴィスコンティ・ポロメオ・リッタ。伯爵はここを、心躍るような場所にしたいと願っていたが、それを美的追求だけで叶えようとはしていなかった。むしろ、それよりずっと遊び心溢れる方法で、来客を楽しませようと目論んでいたのだ。

スタンダールは旅行記「イタリア紀行―1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ」のなかで、「ライナーテの庭園はくれぐれもひとりで歩いてはいけない」と助言している。彼は、ヴィスコンティ・ポロメオ・リッタ家が北イタリアのミラノ近郊に所有する別荘に滞在していた。「この庭では、来訪者をずぶ濡れにするように仕掛けられた噴水が、至るところで待ち構えている。ある階段を上ろうとして一番下の段に足を掛けた途端、私の両脚の下から6本以上の水の柱が噴き上げてきた」。

このいたずらな仕掛けは、今も庭園を訪れる人に不意打ちを食らわしている。ニンファエウム(泉の神ニフを祀る装飾噴水のある建物)の前を歩いていると、思いもよらない場所に仕掛けられたノズルの列から水が噴き出す。それは、いくつかの岩屋のなかにつくられた小部屋から、絶妙のタイミングで引き起こされる。ピロ1世ヴィスコンティ・ポロメオ伯爵が、現在も繰り広げられるこの光景を見たら、大喜びしたことだろう。16世紀後期にこの装置を仕掛けた遊び好きのピロ1世伯爵は、ミラノの政界に身を置く啓蒙的な知識人だった。これらの仕掛装置を取り入れることで、賓客を歓迎し、喜ばせる場所をつくるという夢を叶えた伯爵は、その創造力と遊び心に溢れた型破りな一面も周囲に知らしめるに至り、俄然、一目置かれる存在となったのである。

時には伯爵が自ら、特別につくらせた隠れ場に身を潜め、壁の隙間から噴水を起動させて悦に入った。普段は噴水係が、無防備に歩き回る客の動きに目を配り、地面や彫像、壺、オートマタから水を噴き出させて驚かせるのだが、運悪く不用意に腰掛けに座ってしまった客が、自ら水を噴き出さしてしまうことも希にあった。一方、知恵者の伯爵は、このようにいたずらが成功するのを、嬉々として眺めていたのだ。

こうした独創的な仕掛けによって、ヴィスコンティ・ポロメオ・リッタ家の土地に建てられた素敵な屋敷は、都会の喧騒から離れ、自然に囲まれた、話題でもちぎりの楽しい別荘に生まれ変わった





のだ。芸術家のパトロンで収集家でもある伯爵は、自身がどこよりも感銘を受けたトスカーナのメデイチ家の別荘のように、ほかのどんな貴族も敵わない邸宅にしたいと思っていた。伯爵の屋敷は、たちまち饗宴と娯楽の舞台となり、研究の場、新しいアイデアの実験場、そして王族や文学者、芸術家、詩人たちの隠れ家となったのだ。

ピロ1世伯爵が建築工事を任せたのは、当時のミラノでも傑出した創造の才を持つ俊英のひとりで、ミラノ大聖堂を手がけた建築家、マルティノ・バッシだった。バッシは才能と経験を備えた石工、彫刻家、画家のチームを率い、工事を進めた。今日、幾何学的に整えられた中庭に足を踏み入れると、16世紀の別荘と、18世紀にヴィスコンティ・ボロメオ・アレゼ家およびリッタ家が増築した、時代の異なるふたつの建築物が目に入る。16世紀の建物には「アイネアスの間」があり、トロイアを脱出してローマへ向かうアイネアスの伝説的な旅の場面を描いた一連の絵画や、もともとニンファエウムにあつて経年劣化を免れた作品で飾られている。18世紀の建物にある舞踏室は、特に保存状態のよい部屋

のひとつで、新古典主義の画家ジュゼッペ・レヴァティによるフレスコ画や、壮麗なテラモン（男像柱）が支える漆喰装飾が施された音楽家のバルコニーを備えている。

別荘の北側には、この広大な庭園のなかで誰もが傑作と認めるニンファエウムが建っている。蓋を開けられ、覗き込まれるのを待つ宝箱のように、象徴的な引用や寓話的な意味に満ちたこの建物は、ピロ1世伯爵が、芸術を愛する新妻カミラ・マリノに捧げるために設計したものだ。しかし、その愛の証は、うっとりするような魅力と、いたすらで俗っぽい遊び心の両方を備えたものだった。

トラバーチンと呼ばれる天然石の装飾がちりばめられたニンファエウムでは、さまざまな様式の建築、彫刻、絵画が層をなし、3世紀にわたる美の嗜好を映し出している。岩屋を模した部屋は貝殻やイシサンゴ（海洋環境に対する伯爵の熱い思いが表れている）、オートマタ、彫像、モザイク、そして神々や動物、怪物の壁画で飾られている。生命の象徴である水をモチーフにしているが、いたすら好きな伯爵の手にかかる、それも遊びのひとつになってしまう。



【当ページ】
 (右) 新古典主義様式の砂岩のニンファエウム北側のファサード。遠くに白い給水塔が見える。この塔には7500リットルの水を貯える鋼製のタンクがあり、庭園内のすべての水場に水を供給している。
 (左) 中央の噴水にちなんで名づけられた「風車の中庭」。幼児像が支える鉄の風車から水が噴き出す。地面の小石の間から水が噴き出すこともある。
 【次ページ】
 ニンファエウムの南側のファサードの独特な建築要素とスタッコの彫像がある壁の間は、トラバーチンを張った装飾で覆われている。床のモザイクに隠されたノズルや石の飾り壺の上部からも、冷たい水が吹き出してくる。

(右) ニンファエウムの「古い洞窟」と同じように、各部屋の壁にはモザイクのパネルが飾られているが、デザインは部屋ごとに異なる。黒い石灰岩と白い石英の小片で抽象的な柄を描いたモザイクは、各部屋に美しく大胆な表情を与えている。

ニンファエウムの各部屋は、建設当初から、彫刻や胸像、絵画、珍品など同家のコレクションを展示したり、巧妙で何が起こるか分からない噴水の仕掛けて、散策する訪問者を驚かせたりするために使われてきた。(左) 水圧管も入念に修復され、

噴水や水の仕掛けの多くが蘇った。ピロ1世伯爵の水遊びをすべて再現し、維持していくプロジェクトが、現在進められている。



進取の気性に富む伯爵は、この不思議な場所で、水力学と芸術、工学と建築、科学と錬金術、現実と神秘を融合させた。

仕掛けを踏んでしまうと、水が噴き出し、無防備な客はしぶ濡れになる。大喜びして広間を歩き回る伯爵のマントが床を摺る音が聞こえてきそうだ。

庭園の至るところにピロ1世伯爵の姿が見え隠れし、私たちを魔法の洞窟へと誘う。部屋に入ると、床と壁を覆う白と黒の緻密なモザイク画が、魅惑的な雰囲気を出している。まるで2色のモチーフを紡いだ貴重な織物のように、その効果は絶大で、当時の美の基準を考えると驚くほどモダンだ。別の部屋にはまた違った驚きがある。「卵の部屋」に入ると、天井から霧のように降り注ぐ水の下で、雌鶏のオートマタが待っている。当時、ヨーロッパの宮廷には、ウンダーカンマー（驚異の部屋）と呼ばれる部屋があった。これは珍品のコレクションを陳列するために設けられた、文字通り、驚きに満ちた部屋で、伯爵はそれを見たことがあった。そこには、16世紀にヨーロッパで流行したオートマタも展示されていたが、その起源は古代ギリシャに遡る。ピロ1世伯爵は、1739年にジャック・ド・ヴォーカソンがつくった「消化するアヒル」と同じようなオートマタを、ほぼ2世紀前に自身のニンファエウムに設えさせた、最初の愛好家のひとりだ。

身を隠した噴水係がオートマタを始動させると、紋章から水が噴き出し、雌鶏が生命の象徴である卵を産む。噴き出す水によって、卵は持ち上げられる。壁には、変貌の象徴である蝶や、女性らしさを表す貝殻、男性らしさを仄め

「四風のアトリウム」の左右には12の部屋が並び、全体として長方形の間取りを形成している。かつて伯爵のコレクションが収められていたこれらの部屋には、水が行き渡っている。アトリウムの八角形の空間を囲むように設けられた水場には、風を人格化したブロンズ像が置かれ、風を吹き込み、水を噴き出していたが、現在は失われている。その空洞の上には、漆喰のヴェイナス像とマキユリー像を取めた壁龕があり、隣には四季の寓意像が置かれている。天井を見上げると、ドームの柱がだまし絵のように傾いて描かれているので、真つすぐに見える部屋の中央に移動したくなるのだが、そこでパネの

が見え隠れし、私たちを魔法の洞窟へと誘う。部屋に入ると、床と壁を覆う白と黒の緻密なモザイク画が、魅惑的な雰囲気を出している。まるで2色のモチーフを紡いだ貴重な織物のように、その効果は絶大で、当時の美の基準を考えると驚くほどモダンだ。別の部屋にはまた違った驚きがある。「卵の部屋」に入ると、天井から霧のように降り注ぐ水の下で、雌鶏のオートマタが待っている。当時、ヨーロッパの宮廷には、ウンダーカンマー（驚異の部屋）と呼ばれる部屋があった。これは珍品のコレクションを陳列するために設けられた、文字通り、驚きに満ちた部屋で、伯爵はそれを見たことがあった。そこには、16世紀にヨーロッパで流行したオートマタも展示されていたが、その起源は古代ギリシャに遡る。ピロ1世伯爵は、1739年にジャック・ド・ヴォーカソンがつくった「消化するアヒル」と同じようなオートマタを、ほぼ2世紀前に自身のニンファエウムに設えさせた、最初の愛好家のひとりだ。

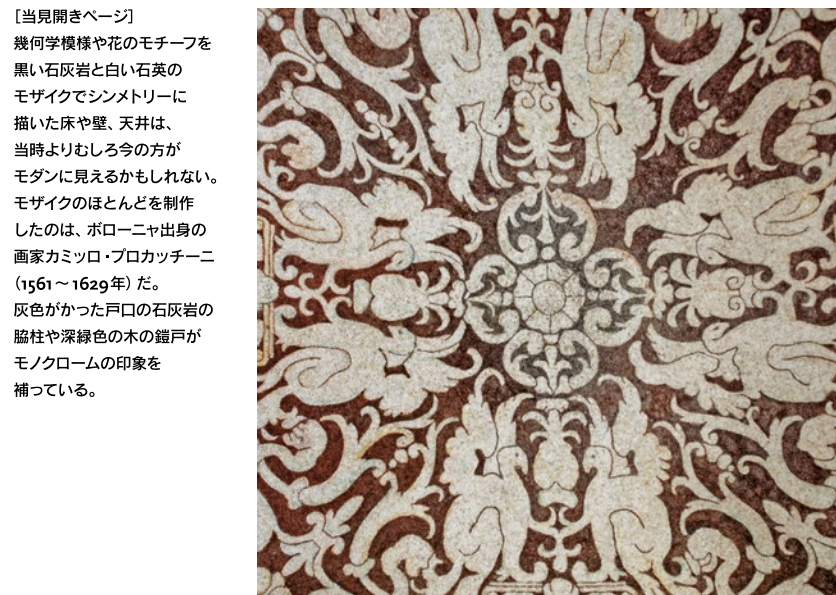
身



(右および左上) ニンファエウム東端にある「古い洞窟」の半円形の通路は、構型のモザイクのパネルや壁龕に収められた彫像が鍾乳石飾りやトラバーチンの造作で取り囲まれている。モザイクの柄には抽象的なものや、動物や植物をかたどったものがあり、

黒と白の石で描かれているが、なかには取りつけた後に茶色や青緑色のテンペラで細部に彩色しているものもある。貝殻の装飾はフォーカルポイントとして、庭園内の各所で見られる。(左下)「卵の部屋」にある雌鳥のオートマタの周囲は、鍾乳石やイシサンゴの

つくり物で覆われている。ここには色とりどりの半貴石や動物の像もある。繊細な修復作業によって、この部屋の仕掛けが復元された。雌鳥の上の壁龕にある小さな水盤から湧き出した水が、大きなバラ色の大理石の水盤に流れ込むと、中央から水が噴き出して卵を押し上げ、浮かび上がらせる。



【当見開きページ】
幾何学模様や花のモチーフを黒い石灰岩と白い石英のモザイクでシンメトリーに描いた床や壁、天井は、当時よりむしろ今の方がモダンに見えるかもしれない。モザイクのほとんどを制作したのは、ポーロニア出身の画家カミッロ・プロカッチーニ（1561～1629年）だ。灰色がかった戸口の石灰岩の脇柱や深緑色の木の鏡戸がモノクロームの印象を補っている。

かす蛇といったシンボリックな装飾が施されている。進取の気性に富む伯爵は、経典の認識や科学的好奇心、また16世紀末の宮廷に特徴的だった科学への魔術の適用などに触発されて、「卵の部屋」で錬金術の実験に時間を費やしたのだ。

ニンファエウムの一角にある「古い洞窟」では、海から生まれた女神ヴィーナスとふたりのナイアス（川や泉の守護妖精）の前に降り注ぐ霧の飛沫が、静かに緊迫感を漂わせている。そうかと思うと、突然、床から水が噴き上がる。神をも怖れぬ、こんないたずらじみた噴水の演出で、すっかり楽しい気分させられるのだった。

ニンファエウムの南のファサードにも、水

を使った独自の仕掛けがある。石のバラストに沿って噴水が連なる、独特の直線的な水景が見られるのだ。床の幾何学模様やアラベスクのモザイクは、ピロ一世伯爵が公の場で好んで読んだ詩の影響を受けているようだ（彼は芸術家や職人、音楽家、俳優の協会である「アカデミア・デイ・ファツキーニ・デッラ・ヴァル・デイ・ブレニオ」のメンバーだった）。だが、その美しさに見とれていると、壁龕に仕掛けられたノズルから噴き出す水を浴びかねないので、ここでも注意しなければならぬ。

伯爵はニンファエウムの水圧装置の設計を技師のアゴスティーノ・ラメッリに依頼した。ラメッリは、レオナルド・ダ・ヴィンチが、

イルモローの異名で知られるルドヴィコ・スフォルツァの宮廷で行った機械工学と水力学に関する研究に触発されていた。この給水塔は、「アルキメデスの螺旋」と称されるスクリーポンプを用いて、井戸の水を大きな貯水槽に汲み上げる仕組みになっている。当時はスポークにつながれた馬が円を描くように歩いてポンプを動かしたが、現在は自動化されている。20メートルの落差と壁内や床下に張りめぐらされたパイプ網のおかげで、水は噴水係が操作するバルブを通じてノズルに流れ込む。これは、今も変わらない。当時の住宅には水道が引かれていなかったことを考えると、実に画期的なシステムだ。

この屋敷は19世紀末から20世紀初頭頃に荒れ果ててしまったが、幸いなことに、1971年にライナーテ市が買い取り、9年後に大規模な修復プロジェクトが開始された。1990年代初頭にこの建築群の認知度を高めるために設立された「ヴィラ・リッタ友の会」によって、水の庭園は蘇った。この素晴らしい場所に、いたずらを楽しんだ伯爵の記憶が生き続けているのは、彼らの努力の賜物だ。水力学と芸術、工学と建築、科学と錬金術、現実と神秘を融合させる魔法。最も素晴らしいアイデアは、しばしば矛盾から生まれる」という言葉を、ピロ一世ヴィスコンティ・ポロメオ伯爵は身をもって証明したのだ。